

青森放送

活動名	RAB 「子供たちとつながり隊」
実施期間	令和7年8月～令和8年2月
実施回数	会場 15 回

【事業実施の成果・課題】

普段授業で使用している教科書を題材に、アナウンサーそれぞれが工夫を凝らした読み聞かせを行いました。子どもたちにとっては日常的な教材でありながら、読み方の違いによって印象が変わることを体感できる新鮮な機会となり、表現方法の多様さを感じてもらうことができたと思います。

また、子どもたちの反応はテーマへの関心度に大きく左右されることもわかりました。単に読むだけでなく、子どもたちの関心を引き出す工夫や双方向のやりとりを取り入れるなど、「引き出し」の幅をさらに広げていく必要があると感じました。

防災講座については今後も継続して実施し、アナウンサーが地域にとって身近な存在となることで、災害時の呼びかけや注意喚起が具体的な行動につながるような信頼関係の構築を目指していきたいと思っています。

【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

<伊東幸子アナウンサー>

参加校の卒業生である記者さんを紹介した場面ではどよめきが起こり、児童の皆さんから「RAB に先輩がいて驚いた」「嬉しかった」「放送の仕事に興味を持った」などの感想も聞かれたため、今後も出来る範囲でこのような+αの楽しい演出もしていけたらと思いました。日常の業務とはまたひと味違う“やりがい”を、この取り組みから感じています。

<吉崎ちひろアナウンサー>

声で表現することの楽しさを感じてもらいたい、と思いながら担当しています。

「楽しい」「悲しい」「怖い」などの声色の違いを聞いてもらってから子どもたちにチャレンジしてもらうと、恥ずかしそうにしていた子どもも徐々に声を出してくれるようになりました。今後も「聞かせる」だけでなく、一緒に声を出す時間も大切にしたいです。

<猪股 南アナウンサー>

声を使いわけて読んだところ、子どもたちが熱心に耳を傾けて聞いてくれた。

普段マイクに向かって話すので、聞いてくれる小学生の顔を見ながら読むと、より気持ちが入った。

防災については、児童のみなさんに身を守る方法を実践してもらい「自助」の大切さを伝えることができた。

<濱野壱清アナウンサー>

子どもたちの様子に応じて、読み聞かせまでのアプローチを変えることが大事だと思いました。子どもたちと関わることでこちらの心も安らぐので今後も続けたいです。

<小林愛理アナウンサー>

子どもたちの目の前で読むと顕著に反応が目に見えるので、うまく注意をひけていない部分がわかり、とても勉強になりました。

興味を持ってもらうためにどう工夫すればよいか、どのように抑揚をつけることが効果的かなどを考え、今後に生かしていきたいと思います。

【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

- ・アナウンサーの読みが上手だった、もう1回教えてほしい。
- ・「わかりやすい伝え方」ができるように頑張りたい。
- ・家に帰ってテレビを見たら、今日読み聞かせをしていたアナウンサーが出ていて嬉しかった。教科書を丁寧に読めるように頑張ろうと思った。
- ・防災についての授業はためになった。家族にも教えてあげました。
- ・読み聞かせで訪問したことでアナウンサーが身近な存在になり、ラジオを聞くようになった。